

隨泉寺寺報

平成16年(2004年)7月号 第407号

082-892-0217 <http://ww41.tiki.ne.jp/~tetunari4/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

安居会法座

講師 元浄寺住職 近藤一也師

講題 「愚になれない凡夫」

大空の 雨はわきても そそがねど うるふ草木は おのがさまざま
(千載) 源信(恵心僧都)

【通釈】大空から降る雨は、地上にあるものを差別して注ぐことはないけれども、それによって潤う草木は、各自さまざまだ。そのように、仏の恵みは無差別でも、衆生が善果を得るかどうかは、さまざまの因縁や精進の仕方などによって千差万別である。

雨の季節です。今年は梅雨といっても快晴の日が続いたり、台風が来たりで、例年とは少し違うようです。しかし雨の少ないのは私にとってはすごしやすくお参りに出かけるのも楽です。しかし中には雨が少なくて困っておられる人もあることでしょう。恵みの雨と受け取られる方もあれば、恨みの雨の方もあることでしょう。まさしく『うるう草木は おのがさまざま』です。

7月の法座予定

- 7月14日昼席午後1時より……安居会法座
- 7月14日夜席午後7時半より……上平原集会所
- 7月15日朝席午前10時より……安居会法座 若い婦人の集い
- 7月15日昼席午後1時より……安居会法座
- 7月20日午後5時より……ビアガーデン
- 8月2日午後6時より……門信徒会本部役員会



若婦人研修会 7月15日

7月15日午前10時より若婦人研修会を開催します。子育てや、お仕事で、なかなかお寺に参るのも難しいことと思いますが、暇を作ってご参加ください。

隨泉寺ビアガーデン 7月20日(火)

午後6時～



今年も去年に続いて隨泉寺ビアガーデンを開催します。今年は空梅雨かと思っていましたが、やはり雨が降って蒸し暑い日が続きます。こんな時はビールでも飲んでウットオシイ梅雨をふっとばしましょう。野菜や果物があれば協力して下さい。



少年少女の集い 一泊研修会

(小学4年～6年)

例年の通り8月3日(火)～4日(水)と少年少女一泊研修会を開催いたします。夏休みの2日間ですが、楽しい思い出が出来ればと思います。今年も出来るだけ楽しい企画を考えています。友達を誘ってたくさん参加してください。



少年少女の集い 一日研修会

(小学1年～3年)

8月4日(水)少年少女の集い1日研修会を開催します。朝から昼過ぎまでの半日ですが4年生～6年生の人と一緒に楽しい一日が過ごせたらと考えています。



御礼

永代経懇志	貳拾萬円	川野 博康殿	故	川野 等様	特別永代経志として
	拾萬円	八木 博文殿	故	八木 博幸様	特別永代経志として
	五萬円	坂根 藤子殿	故	坂根 一美様	特別永代経志として
	拾萬円	中塩ユキコ殿	故	中塩 周三様	特別永代経志として
門信徒会へ	金一封	川野 博康殿	故	川野 等様	香典返し
	金一封	坂根 藤子殿	故	坂根 一美様	香典返し
	金一封	中塩ユキコ殿	故	中塩 周三様	香典返し
特別懇志	貳拾萬円	内海玉恵殿		特別懇志	

父と母が遺してくれたもの

私たち親子は、50年余りを仲良く一緒に過ごし、それぞれが幸せだった。昨年3月元気だった母が、17日間入院しただけで逝ってしまった。まさに青天の霹靂だった。その時父はぼつりと「これも運命」と言った。それから1年2ヶ月、今年5月に父もこの世を去った。母が亡くなってからの父と懲の時間は濃密だったと今振り返る。三人家族で女同士は距離が近く、母のことは良くわかり、沢山の思い出がある。母は最期に私と父との時間を作ってくれたのだと思う。私はいつも父と一緒に、父のことをとても理解でき、二人の思い出も沢山作ることが出来た。そして母はそろそろ大丈夫と父を呼んだのだと思う。母が亡くなった時も、父の時も、涙が溢れて止まらない。しかし姿は見えなくても、いつも私の傍に存在を感じる。葬儀後一人になった時、友人が1枚のCDを持って来てくれた。

『千の風になって』 新井満さんの訳詩・唄・朗読の入ったものだった。

「私のお墓の前で泣かないで下さい。そこに私はいません。眠ってなんかいません。千の風に、千の風になって、あの大きな空を吹き波っています……。」

これはまさに父が私だけに語りかけてくれている言葉だった。私はまた涙が溢れた。私は知らなかったが、この詩は世界中で大切な人を失った人達に読まれている魂の詩だった。

今私には素晴らしい沢山の友人がある。手紙・メール・電話などで励ましてくれる。泣いてなんかいられない。良い友人に囲まれていることに安心して父母は逝ったのだと思う。

父と母が私に遺してくれたもの、それは私のこれまでの人生であり、これからの人生だと思ふ。

そして沢山の支えてくれる友人だと思ふ。これらは私のかげがえのない財産となった。

涙は出る。しかしそれは悲しい涙ではなく、懐かしい涙のように思える。これからも父も母もいつも私の傍にいて見守り続け、間違いのない人生の道をつけてくれると信じている。全ての事、全てのもの、全ての人に感謝し、これまでの幸せだった人生のお礼を何らかの形で表現してゆければと考えている。友人達もまた一緒に考えてくれているのが嬉しくてたまらない。

これからまた沢山の素晴らしい人達に出会えることを楽しみに。

合掌

山本 恭子



『あたりまえ』をみんな なぜ喜ばないのでしょ

カレンダー7月号 東井 義雄

隣の町のお寺の門前の掲示板に、

「目をあけて眠っている人の目を覚ますのは、なかなかむずかしい」

と書いてありました。「目をあけて眠っている人」というのは私のことではないかと思うのといっしょに、悪性腫瘍のため亡くなられた若き医師、井村和清先生が、飛鳥ちゃんというお子さんと、まだ奥さまのお腹の中にいらっしゃるお子さんのために書き遺された『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』（祥伝社刊）というご本のことを思い出しました。その中に「あたりまえ」という、井村先生が亡くなられる二十日前に書かれた詩があります。

あたりまえ

あたりまえ

こんなすばらしいことを、
みんなはなぜよろこばないのでしょ
あたりまえであることを

お父さんがいる お母さんがいる
手が二本あって、足が二本ある
行きたいところへ自分で歩いてゆける

手をのばせばなんでもとれる 音がきこえて声がでる

こんなしあわせはあるでしょうか しかし、だれもそれをよろこばない
あたりまえだ、と笑ってすます

食事がたべられる 夜になるとちゃんと眠れ、そしてまた朝がくる
空気を胸いっぱいすえる

笑える、泣ける、叫ぶこともできる 走りまわれる みんなあたりまえのこと
こんなすばらしいことを、みんなは決してよろこばない

そのありがたさを知っているのは、それを失くした人たちだけ
なぜでしょう あたりまえ

お寺の前で、私は、井村先生の詩と共に、今は亡き塩尻公明先生のおことばを思い出しました。「人間は、無くてもがまんできることの中に幸せを追い求め、それがなくてはしあわせなど成り立ちようのない大切なことを粗末に考えているようだ。例えば、子どもが優等生で、有名中学に入学するというようなことの中にしあわせを追い求めるあまり、子どもが健康でいてくれるというような、それなしにはしあわせなど成り立ちようのない大切なことを、粗末に考えているのではないか」という意味のおことばでした。

